



感染症の往復書簡

2つのアプローチ

青柳有紀・本田 仁 著

●B5変 頁196 2015年

定価：本体4,000円＋税

[ISBN978-4-89592-810-6]MEDSi刊

感染症関連の書籍はここ数年で多種類出ている。とはいえ、実際の臨床現場で多くの医師が困っている複雑なケース(現実のケースはほとんどすべて複雑例)について、感染症科医にコンサルトをしたときの、そのコンサルタントの頭の中をのぞくことができるような書籍ははたしてあったらどうか。しかもその感染症科医がグローバルに活躍している希有な2人のエキスパートであったとしたら・・・。

そこで、この『感染症の往復書簡』が出た。本書はこれまでにないスタイルを取っている。二人の感染症エキスパートが、それぞれのケースでお互いの意見をぶつけ合う他流試合での真剣勝負。吉川英治著の「宮本武蔵」で武蔵と小次郎が対決する巖流島のシーンを彷彿させる。実際に経験した複雑な感染症ケースについて、リアルタイムの時系列ポイントで、感染症科医はどう考えるか？鑑別診断は？エンピリックな治療の具体的な選択は？どのような検査を出す？など、本書では、これらについて困っている我々にアドバイスを与えてくれる感染症科医の頭の中をのぞくことができるのだ。

著者の青柳氏と本田氏は世界で活躍する感染症科医。このお二人の頭の中をのぞくことができる本書はすごい。まず、このお二人のコメントの積集合、すなわち(青柳氏コメント)∩(本田氏コメント)=(スタンダード・オブ・ケア)、といえる。そして、「微妙に異なる意見の相違」をいかに読みとれるかが重要。実はお二人のコメントの微妙な違いを楽しみながら「読める」レベ

ルになると、臨床医学を習熟している証拠。

それだけではない。本書は臨床推論の総論教科書として採用してもよいといえるくらい、推論のルールを説明してくれている。ゼブラ対馬、オッカムの剃刀、ヒッカムの格言、そしてサットンの法則など・・・直観的推論についても、Availability, Anchoring, など重要なバイアスやPremature closureなどの例を挙げており、臨床推論能力の上達に役立つ。しかも、病歴と診察所見の重要性を徹底的に強調してくれている。検査も1つ1つその適応を述べてから推奨している。前半は診断推論、後半は治療推論についてバランスよく提供されている。

感染症の書籍でこれまでと違う点がある。「ケース記述」のなかでCRPやESRがただの一度も出てこないのだ。これはもうおそらく「確信犯」であろう。CRPを測定してもよいであろうと推奨されているケースは1例のみ(再発性化膿性関節炎ケース)であった。それ以外では、WBCは出てくることもあるものの、CRPやESRは単に「無視」されている。日本の検査依存診療に一石を投じている。

ただ、呼吸数は全例で記述されている。このことを、バイタルサインを愛する評者は絶賛する。また、深読みかもしれないが、抗菌薬では、エンピリック推奨ではあえてフルオロキノロンが出てこない・・・さて、表紙カバーをみると、世界の地図があり、著者二人が活躍した土地が描出されている。この世界地図で巖流島はどこなのだろうか？